

アンコール遺跡を旅して

— 森林の影響力の現状 —

大賀 二郎*

はじめに

1991年末から翌年始にかけて、カンボジアのほぼ中央部に位置するアンコール遺跡を訪れた。現地3日間の滞在のため、十分ではなかったが、熱帯降雨林のなかで荒廃していく遺跡を垣間見えた。

特にバナヤン樹によって崩壊するタ・プローム寺院は凄絶な雰囲気を漂わせていた。撮影してきた写真を添えて現状を報告する。

当遺跡の入域は、カンボジア内戦が終結し、治安もほぼ回復されたので1990年頃から再開された。広大な密林のなかに現在でも100を越す遺跡が眠っている。しかし見学の対象遺跡は限定されている。未整備で倒壊の危険があり、また内戦時の地雷が付近に残っている可能性もある。更に密林に残留するポル・ポト勢力とのトラブルも予想される。私たちが訪れた遺跡は、つぎのとおりであった。

○アンコールトム内域（周囲12kmの正方形の堀と城壁に囲まれている。主として12世紀後半ジャヤヴァルマン7世が築く。）内の次の遺跡と周辺の遺跡。

●バイヨン寺院 ●パプオン ●象のテラス ●王宮 ●ピミヤナカス寺院 ●瀨王のテラス ●テッププラナム ●ブリヤプリライ

○アンコールワット（12世紀前半）

○東バライ地域の次の遺跡（アンコールトムの東方域。指定箇所以外に立寄ることは危険で、政府の兵士が自動小銃で警備していた。）

●プラサットクラヴァン（12世紀末） ●王の水浴場スラスラン（12世紀末） ●小部屋の砦バンテアイクディ（12世紀末） ●慈母寺院タ・プローム ●碧王寺院タナウ（11世紀）

遺跡への交通

アンコール遺跡への交通は、日本からはカンボジア国内に向う定期直行便がないため、隣国を経由しての入国となる。空路で成田からバンコックへ。ここで1日滞在中、今度はベトナムのホーチミンへ。ここで2日滞在中、

カンボジア首都プノンペンへ。その次の日やっとアンコールの町シェムリアップに着いた。アンコール遺跡へは、いまのところこのような複雑な経路をとる。

シェムリアップではグランドホテルに宿泊した。1950年フランス統治下に建てられたもので、現在も格調高い外観を保っている。しかし内部の壁面や調度品の傷みははげしい。鍵もかかかったり、かからなかったり、洗面水も出たり出なかったりの状態であった。深夜の外出は禁止されている。

アンコールの歴史

8世紀の初頭、大湖ツァンサップ湖の水資源を基盤としてアンコール文明が芽生えた。湖から縦横に引かれた水路によって、耕地は広域に及び、農作物の増産は更に人口増に結びついた。農業を始めとする生産の向上は、当地方を支配するクメール王国の財政を豊かにし、また使役を目的とする動員を可能にした。王国に蓄積されたエネルギーは、寺院建設や土木工事、更には近隣諸国の侵略に向うのは自然の成り行きであった。

アンコール文明は9世紀頃の初期寺院建築に始まる。12～13世紀にはジャヤヴァルマン諸王の治世に入り、壮大な宗教都市として人口15万人に及ぶ最盛期を迎えた。600を超える寺院、僧院の中央部にはアンコールワットがあった。それは西北1.3km、東西1.4km、幅190mの環濠がめぐる都城であった。今も五つの中央高塔が聳えている。環濠は大洋をあらわし、天界に聳える高樓は須弥山すなわちヒマラヤの高峰を模したといわれる。

アンコールワットに隣接してアンコールトムがある。特にバイヨン寺院は高さ45mの中心の祠堂を堂塔が囲んでいる。堂塔四面に人面の彫刻がある。神秘的口許はクメールの微笑ともいわれる。見る角度によって仏陀の顔とも、悪魔の顔ともみえる。顔面の高さは2mあまり寺院全体で117面が残っているという。

初めに取りあげたタ・プローム寺院は、森林に侵略される寺院の好例である。もともと故人の墓碑を兼ねたもので、妖気の漂う立地にある。

アンコール文明は、1432年アユタヤ戦争のときに放棄されたことが明らかになった。

* 神戸国際交流協会国際部参事 博物館学芸員

1861年フランスの昆虫学者アンリ・ムオは採集活動中、密林の光条のなかに偶然に眠れる大遺跡群を発見した。

フランス政府は直ちに調査団を派遣し、調査、修復そして保存にあたった。しかしその後、第二次世界大戦更にはカンボジア内戦と不幸なことが相次ぎ、遺跡は再び放置され、荒れるにまかせられた。特にボル・ポト勢力の遺跡占領下にあつては、障地構築がされているのではないかと危惧されていた。

遺跡荒廃の概要

遺跡荒廃の状況は、外観では相当深刻に感じられた。特に森林による影響は遺跡構造部にまで及んでいるようであった。

しかし何よりも心配されていた内戦による破壊は想像していたようなひどさはなかった。石柱、壁体の一部に弾痕が残っている程度であった。

当遺跡の訪問は初めての経験である。荒廃がどのように進行してきたか、時間的な関係ではわからない。文献に残っている過去の写真と対比してみると、30年あまり前とはあまり変化がないように思える。印象に残った点をかかげる。

(1) アンコールワット正面の環濠は、1989年以前の写真では満々と水を湛えていたが、現在は浅くなり、水面全体が水草に覆われていた。ウォーターヒヤシンスがかなりの面を占めていた。一部干上がった陸地が寺院側から広がっていた。

(2) バニヤン樹による被害は極めて大きいことには違いないが、ここ30年以前の写真と比較すると、外観的にはあまり進行していない。樹の成長も大ききの限界に達して止まっているように思えた。

(3) アンコールトム内のバイヨン像は、ここ20～30年ほとんど変化がないように思えた。かえて顔面のツタ、カズラの類が除去されて整然としていた。

(4) デヴァターの女神浮彫は、腕のあたりが風雨に晒され、やせ細っているように思えた。

現地では遺跡修復が地道に進められていた。ポーランドがバイヨン寺院、インドがアンコールワットを担当していた。部分的には過去の写真当時より、小木、雑枝などが整理されていた。

遺跡の修復、周辺整備などは、今後国連などによって一元的に進められ、そのための多国間協議が行われることになっている。

遺跡荒廃の諸相

アンコール遺跡群の荒廃は、自然要因と人為的要因があげられる。

まず自然要因としてつぎのことが考えられる。

(1) 生物による作用

遺跡に最大の破壊力を発揮しているのは、現地名スボアンと呼ばれる大樹である。これはだれの目にも明らかである。同樹は英語名はバニヤン (banyan)、一般的には中国名の榕樹が通っている。沖縄ではガジュマルと呼ばれている。学名は *Ficus benghalensis* L.。クワ科の常緑樹で、アジアの熱帯樹林のなかでは特に成長力が強く、樹高30mに達する。樹幹太く、枝から多くの気根を出し、地上に達すると幹となって更に一本の樹木として成長する。

このような特性から一旦遺跡のどこかに根を下ろすと、根が大蛇のように屋根を這い廻り、構造物を巨大な力で締め上げ、また地中から持ち上げる。やがて樹が成長の頂点に達すると、自重を支えきれなくなり、バランスを失って倒壊する。同時に遺跡も崩壊する。その惨状は目を覆うばかりになる。

バニヤン樹の被害が目立つのはプリアプリライ寺院、タ・プローム寺院などで、特に後者は甚大で鬼気迫る感じがする。樹が寺院構造物のなかから入道のように立ち上り、石屋根を太い腕のような根で抱え込んでいる。寺院の悲鳴が聞こえてくるようだ。修復には全石組を解体しなければならないだろう。

他に植物の蔓、蘚苔類、地衣類の付着、桿菌の発生、シロアリの食害など。それに伴う石材の変質があげられるだろう。これらは全遺跡に及んでいる。バイヨンの顔面には青カビが付着、荒れている。植生も絶えず変動しているように思える。その変化は遺跡表層部に影響するだろう。参道の石畳の間からタデ科、マメ科などの植物が立ち上っている。内庭は足の踏み場もなく草木が茂っている。壁体の亀裂に灌木の根が喰い込んでいるところも多い。

(2) 自然現象による作用

風雨、温度、光線、更に最近取りあげられている酸性雨 (Acid rain) なども石質構造に影響を与える。

アンコール遺跡は密林によって強風がかなり防がれるとみられるが、逆に熱気や湿気がこもることも考えられる。その作用かどうかわからないが、石材表面は幾分湿っており、全般にもろい状態になっている。

カンボジアは過去に大きな地震を経験していない。アンコールの築造にはその計算がなされていないように思える。地震国ではないが、もしものことがあれば甚大な被害がでるだろう。

(3) 自壊作用

遺跡に用いられている石材は前アンコール時代は煉瓦と紅土 (ラテライト) が主体であった。後期は建築技術、土木工事の向上によって砂岩がこれに代った。遠方の産地から主に水路で搬入された軟質の石材であり、高層寺

院は水平積みで積み上げられている。

生物や自然作用以外に、地盤沈下や石材自体の寿命がある。また築造による力学的な耐久限度もある。アンコールワット、バイヨン寺院などの高層構造の下部の柱、壁体部などの随所に歪みや剥離などが生じていた。

更に長年月の放置による砂塵、コウモリの排泄物などの堆積がみられた。特に後者は石室、廊下などの暗所には必ずといってよい程みられた。アンコールワット内部は異様な臭気が漂っており、現実にコウモリの姿が見られた。

次に人為的要因としてつぎのことが考えられる。

(1) 管理の不徹底

遺跡は不作為のまま4世紀あまりも放置され、そのほとんどの期間は無住であった。発見されたときは密林のなかに埋没する様相を呈していた。

(2) 盗掘

アンコール遺跡は女神デヴァター立像盗難事件など数々の事件が発生している。ジャヤヴァルマン7世の石造座像は、過去の写真では5体揃っていたが、現在は頭部が欠如している。壁面浮彫の女神像に盗掘の跡があった。無造作に剥ぎ取られたものが多く、盗掘による損傷が他の部分に影響することも考えられる。

(3) 戦乱による破壊

カンボジア内戦、特にポル・ポト勢力の支配下における陣地構築、地雷付設など憂慮されていたが、構造部には及んでいなかった。

周辺の樹木の樹幹から樹液を採集した跡が各所でみられた。樹幹を傷つけ、ゴムを採取するのと同じ要領である。燃料や化学材料にされるとのことである。樹が痛み、枯死しているのもあった。その他、生材の伐採もみられた。許可されたものかどうかかわからないが、周囲の環境に影響するだろう。

(4) 観光化による影響

カンボジアの復興は、国連暫定統治機構によって進んでいる。政情が安定し、不安要因がなくなれば、遺跡の観光は飛躍的に伸びるだろう。自動車の排気ガス、観光客の遺跡内通行などによる影響が論議されるだろう。

おわりに

人間が築き上げたものは、人間が管理しないと崩壊する。すべてが自然に還ろうとする働きがある。

アンコール遺跡はこの好例である。4世紀にわたって密林に放置された遺跡のなかには、すでに土に還ったものや回復不能になったものがある。

バナヤン樹による崩壊、風雨による損耗、盗掘、戦乱など荒廃の諸相も多様にわたっている。修復費用、技術

とも測り知れないものがあるが、いずれ修復が行われるだろう。

修復にあたって、その背景となる自然環境をどうすればよいのだろうか。

アンコール遺跡は遺跡自体の価値もさることながら、密林に覆われた凄絶な自然景観が一体となって、独特の雰囲気醸成している。自然環境が遺跡を破壊しつつあることも厳然とした事実であるが、仮に密林を取り除いたとして、その後の姿はどんなものになるだろうか。また、そのような環境変化は遺跡の寿命に影響しないだろうか。

特にタ・プローム遺跡はバナヤンの根が縦横に走り、遺跡を包み込む状態になっている。そのまま放置すれば、いずれも瓦礫の山と化すであろう。全部解体して再度復元することも可能かも知れないが、完成後の印象は似ても似つかぬものとなろう。

またバナヤン樹は生命力の強さから聖樹として信仰対象にされている地方があり、この面からの慎重さも求められるだろう。

アンコール遺跡は密林に埋没した特異な遺跡として、その景観と学術的価値をもっている。自然を原生的な状態で維持しながら、国家の重要な観光収入を支える、いわゆるエコツーリズムの思想が背景にある。

修復にあたっては、自然環境をどのように保持していくか、今後の大きな課題となるだろう。

いま、遺跡周辺は意外と静かである。多重な自然環境だが、樹間に跳び交う猿たちの姿は見えないし、密林の空間に浮ぶ蝶の姿も稀である。一度オオゴマダラの一羽の見事な飛翔を見ただけであった。密林の暗闇にはどんなものが潜んでいるか定かではないが、一見しただけではその気配はない。カンボジア全土には、コブラ、サソリなどの有毒動物が生息するといわれているが、ここアンコール地域ではその危険はないという。

静穏な遺跡のあたりで、ときどき鳥の啼き声がする。それは密林のなかに反響するように聞こえる。夕刻になると、初めて蝉が鳴き始める。その鳴声は静かで澄んでいる。

樹幹の高いところにはセロジネ属の着生蘭やボルボリューム属のシダが見える。しかし植物の種類も決して多くはない。

密林の沈黙のなかで、壮大な遺跡が眠っている。この眠りを覚さないようにしたいものである。そして、いつまでも幻都であることを望むのは無理であろうか。

参考文献

NHK取材班ほか (1989)『美の回廊をゆく』日本放送
出版協会

ジョルジュ・セデス(1990)『アンコール遺跡』連合出版
(三宅一郎訳)

町田甲一編著 (1968)『アンコールワット』講談社
(世界の文化史蹟第6巻)

ローズ・マッカレー(1966)『世界の遺跡』美術出版社
(黒田和彦ほか訳)

藤島 泰輔 (1960)『アンコールの帝王』展望社

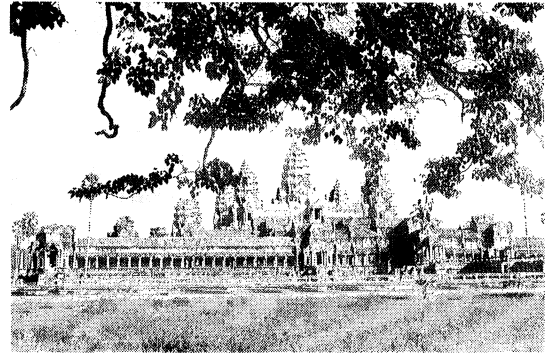
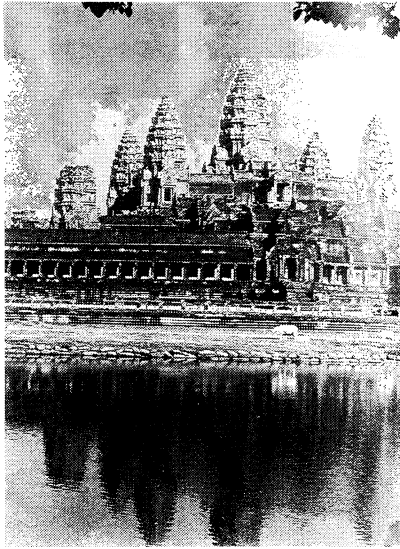


図1 アンコール正面

左図：1968年以前の撮影（『世界の文化史蹟第6巻』講談社
より）

上図：1991年12月31日撮影（左図に比し、水面が見えず、水
草が茂っている。）

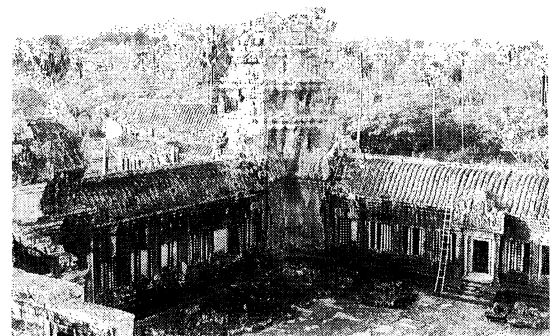
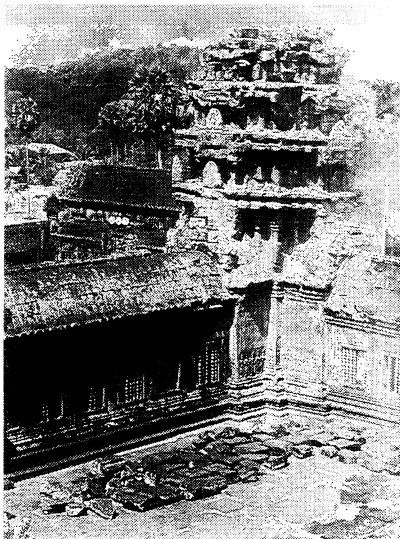


図2 アンコールワット第二回廊の一部

左図：1968年以前の撮影（『世界の文化史蹟第6巻』講談社
より）

上図：1991年12月31日撮影（左図とほとんど変化はみられな
い。除去した石材の位置も同じである。）

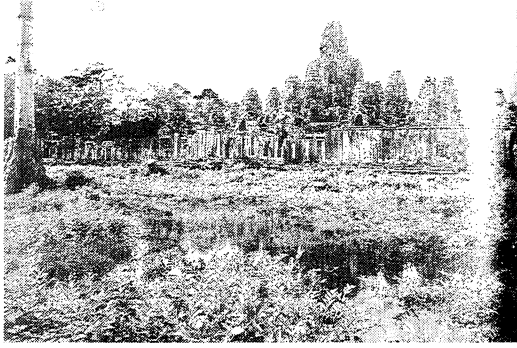


図3 環濠に映えるバイヨン寺院

上図：1989年以前の撮影（『美の回廊をゆく』日本放送出版協会より）

右図：1991年12月31日撮影（上図に比し池のあたりが整理されている。しかし、寺院の前面には新しく樹木が立ち上っている。）

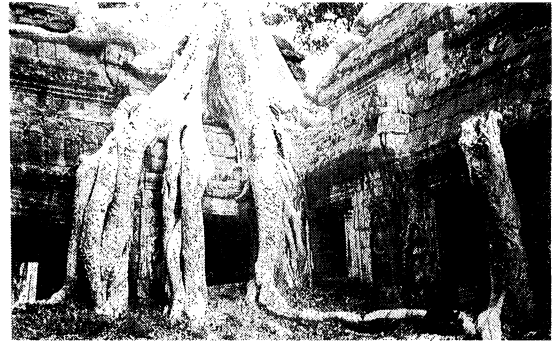
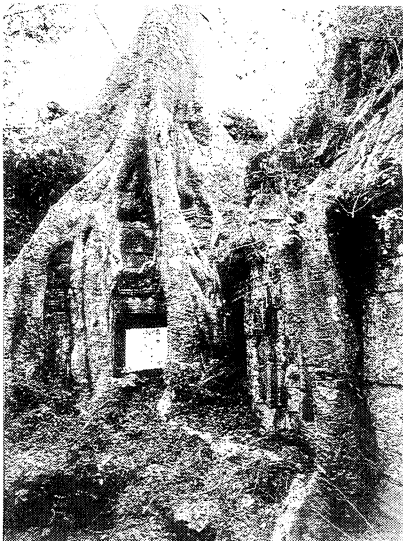


図4 タ・プローム寺院におけるバナヤン樹の侵入

左図：1989年以前の撮影（『美の回廊をゆく』日本放送出版協会より）

上図：1992年1月1日撮影（左図の時期と比し、樹の成長はあまりみられない。しかし、小枝が取り払われ、幾分整理されている。）

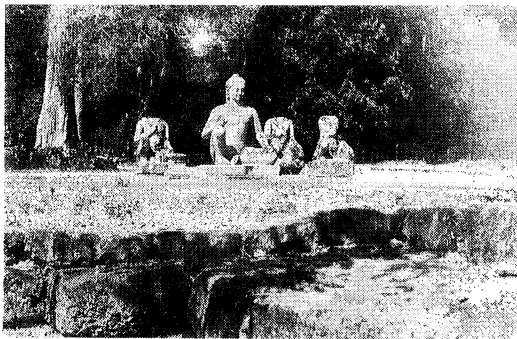


図5 癩王のテラス上のジャヤヴァルマン7世の石造

上図：1968年以前の撮影（『世界の文化史蹟第6巻』講談社より）

右図：1992年1月1日撮影（8石造の頭部が消滅している。）





右図：1992年1月1日撮影
(石彫の一部が消滅している)



図6 スラスラン

上図：1968年以前の撮影（『世界の文化史蹟第6巻』講談社より）

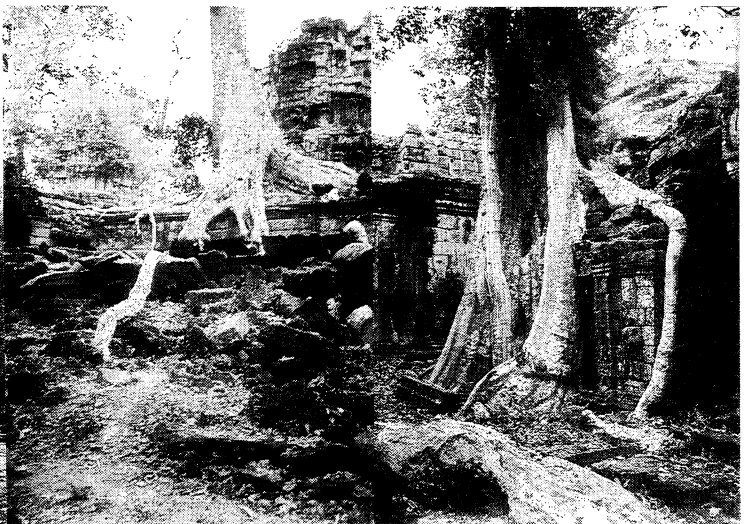
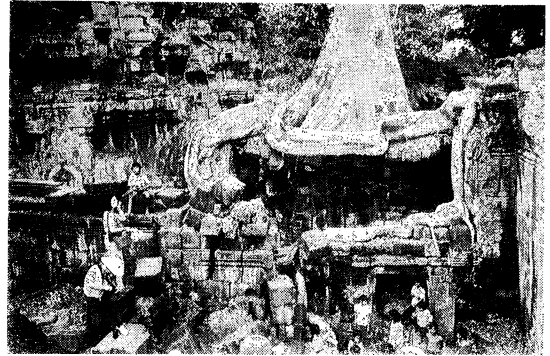
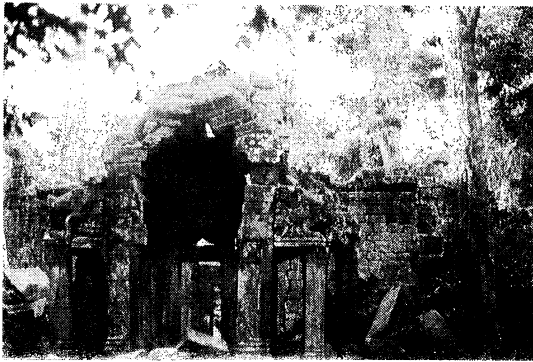


図7-1 バニヤン樹によって崩壊するタ・ブROOM寺院
1992年撮影



図7-2 バニヤン樹によって崩壊するタ・ブローム寺院（1992年1月1日撮影）



図8-1 バイオン寺院
1991年12月31日撮影

- A : バイオン寺院参道（石畳にはびこるタデ科の植物）
- B : バイオン像（背後に森林が迫っている。）
- C : バイオン像の精緻な石組
- D : バイオン寺院（石積だけで安定が保たれている。）
- E : 石畳の上で根を張ろうとするバニヤン樹

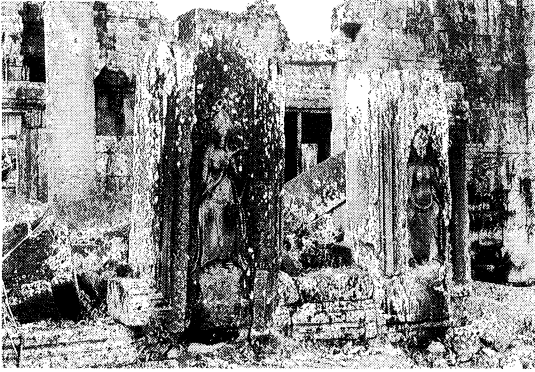


図8-2 バイヨン寺院（1991年12月31日撮影）

上図：倒壊が始まっている。

右図：女神デヴァター石像（歳月の流れに腕がやせてきている。）

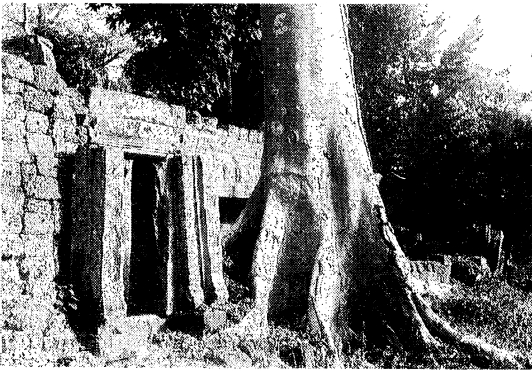


図9 バニヤン樹（1992年1月1日撮影）

左上図：寺院の壁面に根を差し込んでいる。

左 図：寺院の遺跡から立ち上る（テッププラナム付近）

上 図：同 上





図10 小山に変わりつつあるハブーオン寺院
1992年1月1日撮影



図13 癩王のテラス壁面（1992年1月1日撮影）
ツタやカズラの類がからみつく。

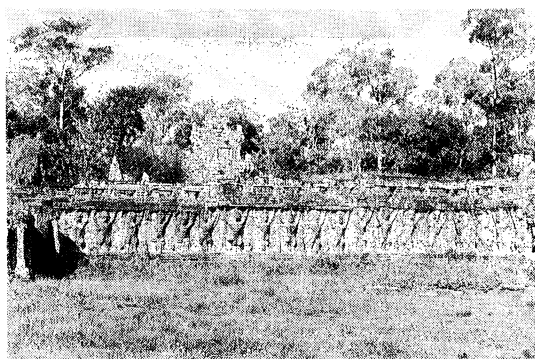


図11 王宮城壁の一部（1992年1月1日撮影）
内部は密林と化している。



図14 樹液の採集（1992年1月1日撮影）
ブリヤブライ付近。燃料が薬品材料にするとい
う。



図12 湿地が迫るブリヤブライ（1992年1月1日撮影）